



ふたりのママ

豊乳義母と若尻叔母

芳川葵

挿絵／英田舞

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

第一章	豊乳義母からの贈りもの	4
第二章	若尻叔母のエッチな悪戯	31
第三章	初体験は浴室で	65
第四章	背徳寢室の夢体験	110
第五章	禁断の相姦電話 叔母の姦計・義母の覚悟	169
第六章	豊乳と若尻の狂艶	220
終章	プレゼントは豊乳で	271

登場人物

Characters

畑中 諒子

(はたなかりょうこ)

三十四歳でヘアサロンを経営している美容師。義理の息子・祐介を溺愛する息子に甘い母親。普段は清楚でおっとり系な彼女だが、息子のこととなるとムキになる面も持っている。

秋山 貴和子

(あきやま きわこ)

諒子の妹で二十八歳のキャリアウーマン。エキゾチックな雰囲気がある漂う長身の美女。自身の子供がいないためか甥の祐介を可愛がっている。既婚だが祐介を誘惑する痴女的な部分も……。

畑中 祐介

(はたなか ゆうすけ)

性に敏感な十五歳の高校一年生。美しい義母に憧れを持つ。



若い牡の匂いに触発されたのか、柔褻がざわめきだし、淫裂が喘ぐように収縮していくのを感じる。溢れ出した蜜液がクロツチから染み出し、内腿に流れ落ちはじめた。腿同士をこすり合わせる、クチュツと小さな蜜音が聞こえてくるほどだ。

「ほんとに凄い。逞しくて、立派よ」

「き、貴和子、叔母、さん」

貴和子の鼻にかかった声と、祐介の恥じらいに震える声が重なり合う。甥は羞恥心が募ったのか、両手で硬直を隠すそぶりをみせた。

「ダメよ、祐くん、隠したらお口でしてあげられないでしょう」

ズボンとブリーフを足首までおろしていた貴和子が、甘い声で戒める。

「でも叔母さん、やっぱり恥ずかしいよ」

「なら、やめる？ 叔母さんはやめてもいいのよ。甥っ子のオチンチンをしゃぶってあげるなんて、本来は許されないことですものね」

「そ、そんな……」

「ふふふっ、嘘よ。さあ、早く手をどけなさい。そうしたらすぐに、くわ啜えてあげる」

貴和子が右手の親指を煽情的に朱唇に啜え、切れ長の瞳に淫靡の光を湛えて見上げてやると、祐介はおずおずと両手をどけてきた。同時に足踏みをするようにして、足

首のところでも絡まっていたズボンとブリーフから足を抜いていく。

下腹部に貼りつきそうな急角度でそそり立った肉柱が、裏筋から陰囊までを曝け出す格好であらわれた。興奮が高まっているのか、触る前から肉竿がピクピクと小刻みに震え、亀頭の頭から先走りの粘液がねっとり垂れ落ちてくる。

「あんツ、ほんとに淫しいわ。叔母さんもたまらない気持ちになっちゃう」

熱い吐息混じりの声で囁くと、媚びた眼差しで祐介を見上げた。甥が総身を震わせたのが伝わってくる。

「お、叔母さん、早く。じゃないと僕、出ちゃうよ」

「そうね、早くしないと叔父さんに見つかっちゃうものね」

かすれた声で言うと、右手をのばし、先走り液で濡れている肉竿の中央付近をやりわりと握っていく。又チョツとした粘液にまみれた鋼のごとき硬直に、貴和子は軽い眩暈に襲われた。肉柱に絡めた指が若牝の放つ熱気で焼けそうである。

「はうん、こんなに硬くて熱いなんて、もう、いけない子なんだから」

甥のペニスの胴回りを確認するように握り直し、ゆつくりと上下に抜きあげていった。又チュツと湿音が小さく鳴り、さらに溢れ出した先走り液が、肉竿を握る貴和子の指にも垂れ落ちてくる。生温い粘液がじつとりと指先から浸みこんでくるようだ。

「あうっ、ク、くううっ……」

祐介が喜悦に震えたうめきを発して天を仰いだ。このままペニスに指を絡め、何度か上下させてやれば、それだけで間違いなく白濁液を噴きあげるだろう。

しかし、それでは姉がやったことと全然ら変わらない。乳房に触れさせてやっていない分、軍配は諒子にあがるはずである。それでは、祐介を悦ばせてやる意味がない。

「それじゃあ、お口でしてあげるわね。……はぐうん、うん、ふうん」

貴和子は躊躇いもなく、先走り液を垂れ流している亀頭を口に含んでいった。とたんに口腔内には苦み走って生臭い、若い牡の薄汁が吹きつけられてくる。

（うわっ、なんて強烈なの。先走りでこんなに濃厚だなんて、精液はどれだけ濃いのかしら）

ヌメツとした舌先で亀頭の周囲を舐るように舐めていくと、次から次へと先走り液が口内に放たれ、それを燃料とするように貴和子の脳に淫欲の炎が燃えあがっていく。「くふお、ほ、ほんとに僕のが、叔母さんの口に」

快感に膝を震わせた祐介が、両手を貴和子の栗色のストレートヘアに這わせ、サラサラの髪を掻き毟ってきた。

貴和子は眉間に皺を寄せつつ、丹念に亀頭周辺を舐め清めていった。亀頭裏側の窪

みに舌が触れると、祐介の腰が激しく震え、頭頂部を押さえこまれてしまう。

(感じてくれているのね。 ああん、祐くん)

切れ長の瞳がさらに細められ、膜がかかったような感じになる。その目で甥っ子を見上げていくと、ちょうど顔を下に向けてきた祐介の目とまともにぶつかった。

その瞬間、祐介の腰がまたしても震え、口腔粘膜に先走りの液が吹きかけられる。貴和子は瞳に艶美な微笑を浮かべ、ゆっくりと首を振りはじめた。ビチュツ、ビチュツと湿った音を立てて、亀頭部分だけを唇粘膜とぬめった舌で舐っていく。

「ンぐつ、うん、はふうん……」

鼻からはくぐもった息が漏れ、祐介の陰毛をそよがせていく。

「叔母さん、あッ、くつ、あうう」

切なげに祐介が腰をくねらせる。見上げる瞳には、身悶える甥の表情が映りこんでいた。その反応が可愛く、クスツと小さく笑う。意識したわけではなかったが、敏感な亀頭裏の括れで舌先がビブラートすることになり、さらなる悦楽を与えてしまった。「はうん、うん、はふッ、又チュツ、グチュツ……」

右手で肉竿の中央を握った貴和子は、本格的な口唇愛撫に移行していった。窄めた朱唇を、幼いながらも張り出したエラに引っかけるように、首を前後に振りはじめ

粘ついた淫音が鳴り、祐介の腰は小刻みな痙攣に見舞われていく。

「くカあ、あッ、くうう、おっ、貴和子、叔ば、さん。あう、ああ……」

(はうん、いいのよ、もつと、もつと感じてちょうだい)

口内に溜まっていく唾液と、先走り液を喉の奥に流しこみながら、貴和子自身も官能の炎に煽られていた。

「ダメ、そんな、ああ、溶け、ちやうよ。叔母さんのヌメヌメした舌とお口、気持ちよすぎて、チンチンが溶けちやうううう」

祐介の悦楽声が、甘美な悦びを全身に伝えてきていた。首を振るごとに、ネグリジェに硬化した乳首がこすりつけられ、甘痒い悦楽が背筋を駆け巡る。内腿同士をすり合わせるようにして、しとどに濡れた淫裂に刺激を送りこんでいく。わずかな快楽にも腰を悶えさせてしまう。

(欲しい、いやらしく濡れちゃってるオマ○コの奥を、これでズンズンして欲しい)

快感を求めて蠢く膣壁に影響された脳が、フェラチオだけではすまされない気持ちの昂りを吐露する。

カラ、カラ……。

燃えあがる欲望に冷や水を浴びせるように、浴室の引き戸が開く乾いた音が貴和子



の耳に届いた。

「ンッ！」

現実には引き戻す音に、貴和子は一瞬、目を見開いた。悦楽の波間を彷徨さまよっている祐介には聞こえなかったのか、陶然とした表情を浮かべ、叔母の髪に指を絡めてきている。発射の瞬間が近いのか、先ほどよりも腰のくねり具合が大きくなってきていた。

（あんッ、大変、こんなところをあの人に見つかったら）

悩ましく眉間に皺を寄せつつ冷静さを取り戻した貴和子は、頬を窄ませて硬直を扱きあげていった。ズボッ、ジュポッと粘ついた音が立ち、朱唇と口腔内を器用に動きまわる舌で、いきり立ったペニスを翻弄していく。

「うッ、ああ、だ、ダメだよ叔母さん、強すぎる。僕、もう……くおッ、口に、叔母さんの口に出ちやうよ」

（いいのよ、出して。叔母さんが全部、ゴックンしてあげるから）

貴和子はその言葉に、一際激しい吸引で応えた。さらに射精を助長しようと、左手を陰囊の下部に這わせていく。すると陰囊が縮こまっているのが分かる。睾丸も肉竿の根元方向へとずりあがっていた。ずりあがった睾丸をマッサージするように、優しく揉みこんでやる。

「くはッ、そんなところまで……。あつ、うう、ほんとにいいんだね。僕、叔母さんの口の中に、あうっ、くっ、で、出るよ、あつ、ああッ」

ビクンッと腰が激しく震え、亀頭が一段と膨張したのを感じた。その直後、熱い欲望のマグマが喉の奥に叩きつけられてくる。

「ンぐっ」

その瞬間、貴和子は目を見開き、眉間に寄せられていた皺には苦悶が浮かんだ。それでもペニスを解放することはせず、噴火の脈動が治まるのをじっと耐えていた。

少年のエキスはこつてりと濃厚で、生臭かった。饅えた精臭が、内側から鼻腔粘膜を刺激しつづけてきている。

「うわッ、くっ、おお……」

喜悦の咆哮を漏らす祐介の腰は、射精の痙攣で自然と突きあがってきていた。

「ふぐ、んっうん、コクッ、ううん……」

鼻から苦しげな息を吐きつつ、喉を鳴らして放出されたエキスを、少量に分けながら嚥下していく。

濃密すぎて、喉に引つかかるようなところもあつたが、それでも貴和子は甥の精液を飲み干していった。最後の一滴までも搾り出すように、睾丸を揉む左手は

その動きを止めることなく、脈動の間中、愛撫を加えつづけていた。

「くわッ、すっごい。叔母さんに吸い出されてくうう……」

射精直後の脱力感の影響か、祐介の膝はガクガクと震えていた。貴和子の頭部に這わせた両手で、叔母の頭を押さえるようにして、辛うじて立っている感じだ。

「ムチュッ、クチュッ、チュウウ……。チュポン、はあ、ああ、ああん……」

貴和子がペニスを解放したのは、十回以上の脈動ののち、ようやくおとなしくなったペニスから、残滓を吸い取るようなバキュームを施したあとであった。

目をほのかに上気させた瞳には凄艶な色気が滲み、無意識に媚びる視線で甥を見上げることとなってしまった。

「まさか、ほんとに、飲んで、くれるなんて」

「ンくっ、うん、コクッ。すっごく濃いね。素敵だったわ。また、飲ませてね。今度のもっと、凄いことしてあげるから」

陶然とした顔で見下ろしてきた祐介に、貴和子は口内に残っていた最後の白濁液を飲み干すと、悩ましさの中にも母性を感じさせる笑みを浮かべ、次のステップへの示唆を口にするのであった。

諒子は腰を息子の顔に向かって落としつつ、上体を倒していった。Fカップの熟乳が柔らかく揺れながら、祐介の腹部に押しつけられてくる。ムニユツと潰れていく感触を覚えると同時に、いきり立っ硬直の裏筋に熱い吐息が吹きかけられてきた。

義母のしなやかな手がペニスを摘み、啞えやすいように起こされていく。やがて、生温かな粘膜に亀頭がくるまれていった。

「んはッ、ううん、チュパッ、ちゅぷっ、ぬちゅっ」

「くふッ、おあっ、ううう……」

ビクッと腰を突きあげ、祐介はうめきを発した。負けじと両手で諒子のむっちりとした太腿を抱えこんでいく。手の平に吸いついてくる肌触りに陶然としつつ、顔を少し浮かせ気味にして、甘蜜溢れる淫裂へと舌を突き出していった。

「ぐふうッ」

「うはッ」

甘酸っぱい牝蜜が舌先に踊った瞬間、義母の腰が震え、亀頭を啞えこんでいた朱唇がキュッと締まった。肉竿の包皮とカリ首の合わせ目の段差が締めつけられてくる。あまりに予想外の刺激に、祐介も思わず喘ぎを漏らしてしまった。

「うんッ、はふう、ううん。じゅちゅっ、チュウウッ、むちゅるうう……」

諒子がゆっくりと首を上下に振りはじめた。クチュツ、クチュツとくぐもった音が断続的に沸き起こり、痺れるような快感が硬直から全身へと伝わっていく。寧丸が一際迫りあがってきた感じとなり、煮えたぎったマグマが陰囊内部を暴れまわる。

「うッ、くうう、あああ……」

確実に近づく射精の瞬間に耐えつつ、祐介は淫臭漂う熟母の秘唇に挑みかかっていた。愉悦に腰を震わせながら、舌をのばし何度もクレバスを上下に舐めていく。すると諒子の腰も悩ましくくねり、美母も快感を得ていることを教えてくれた。

ママが感じている。そう思うと、祐介は俄然やる気になった。蕩けるように甘い蜜液をせっせと喉の奥に流しこみ、次いで舌先を下方、母の秘唇の合わせ目方向へとおろしていった。充血した淫突起の、コリツとした感触が舌先を襲う。

諒子のクリトリスは、舐め慣れた叔母のものよりも少し小さいようだ。包皮から先端だけをちよこんと出し、頼りない感じがするものの、それが義母の淑しとやかさと共通しているようでもあり、祐介の胸に一層の愛おしさが増していった。

「ングッ、ううん、はうう……」

ペニスを口に含んだまま諒子が悦楽のうめきを発した。義母が目を剥いて感じてくれている姿を想像しつつ、尖らせた舌先を小さく円を描くように動かし、肉芽に刺激

を加えつづけた。清楚な母の卑猥な感触である、コリツとした舌触りが癖になる。

「はぐつ、くうん、あうう」

祐介が淫突起を集中的に愛撫していくと、義母の首の動きがぱったりと止まった。硬直を根元まで啜えこんだ姿勢で、苦しげなうめきを鼻から漏らしている。

これは祐介にとつても想像以上に効いた。諒子がうめきをあげることにより口腔内の粘膜や舌が蠢き、予想外の部分に絡まりつき刺激を加えてくるのだ。

(こ、このままじゃ、ママの中に挿れさせてもらう前に、出ちゃうかもしれない)

腰が自然と小刻みに何度も突きあがり、射精の前兆のように先走り液がどんどん溢れ返っていく。しかし、限界を感じていたのは祐介だけではなかった。諒子もまた、絶頂寸前まで追いこまれていたのだ。

「くうん、ぷはあく、あん、ゆ、祐ちゃん、ママ、もうダメなの。お願い、この硬いオチンチンで、膣中からママを感じさせて」

諒子はやつとの思いで硬直を朱唇から抜き取ると、右手の甲で口元を拭い、悩ましく蕩けた眼差しで振り返ってきた。

「マっ、ママ」

「お願い、祐ちゃん」

「もちろんだよ、ママ。僕だって、もう……。だから、早くママの中に」

甘く囁くような義母の声に、祐介もベッドから起きあがり、喘ぐような声で返事をした。諒子はベッドにあお向けに横たわり、膝を立てるようにして両脚を開いてくる。口を開けた淫裂から覗く、美しいサーモンピンクの腔壁に、祐介は背筋を震わせた。いよいよ、憧れの義母と体験できるのかと思うと、感動で身体が動かなくなってしまう。

「さあ、どうしたの。来て、祐ちゃん」

「ね、ねえ、ママ。僕、後ろから、してみたいんだけど、いいかな？」

祐介とて、初めての美母とのセックスは、諒子の美しい顔が快感に歪む光景を眺めながらしたい気持ちはもちろんあった。

しかし、それ以上にどうしてみたいことがあったのだ。それは、四つん這いになることによつて量感が増すであろう乳房を、思う存分に揉みしだくことであった。諒子の乳房は、ただでさえFカップの豊乳である。そこにきて四つん這いになれば、熟した乳房が重力に引かれ、さらなるボリュームを増すことになるのだ。

その熟乳を後ろから鷺掴みしつつ、大好きな義母を後ろから突くことができれば、どんなに素晴らしいセックスになるであろうか。想像するだけで、射精感がこみあげ

てきてしまいそうである。

「バックから？ ふふつ、祐ちゃんったらエッチね、どこでそんなこと覚えるのかしら。でも、いいわ。あなたが望むなら、ママどんな格好でもしてあげる」

媚びる瞳で見つめてきた諒子は、立てていた膝をおろし、しどけない仕草で起きあがると、改めて四つん這いのポーズを取ってくれた。両腕の前腕部分をマットレスにつき、祐介に向かって高々とヒップを突き出してくる。

「すッ、凄い」

陶然とした眩きを漏らした祐介だが、胸にチクツと痛みが走っていた。「どこでそんなこと覚えるのかしら」何気ない母の言葉が、叔母との禁断の関係、諒子にとっては裏切りでしかない爛れた関係を指摘されたように思え、後ろめたさが甦ってくる。

「どうしたの祐ちゃん。あなたの言うとおり、四つん這いになったのよ。来て。祐ちゃんの硬いオチンチンで、ママを貫いて」

ムチツと熟れた双臀を悩ましく振りながら、諒子が挿入を促してきた。

「も、もちろんだよ。僕だって、早くママの中に挿れたいんだから」

脳裏をよぎった後ろ向きな感情を振り払い、捧げられた義母のヒップの真後ろに陣取った。目の前には甘蜜を垂れ流す淫裂が、匂い立つ牝臭をまとして結合の瞬間を待

ち受けている。

誘うようにヒクヒクとなっていている秘唇と、その上部に晒されたセピア色のアヌス。普段の美母からは想像できない淫態に、祐介は軽い眩暈に襲われた。

「さあ、祐ちゃん」

諒子が股間の間から右手を後方に突き出してきた。義母はきつと、息子がまだ童貞だと信じているに違いない。そのため淫裂へとペニスを誘導してくれる気なのだ。貴和子とのセックスで、誘導なしでも挿入できるようになってはいたが、祐介は美母の導きに身を委ねることにした。

膝立ちの姿勢でにじり寄るように、諒子のヒップに身体を近づけていく。両手をのばし、ムチムチの双臀を掴んでいった。

パンツと張った肌の中に、指が沈みこむほどの柔らかさが内包されていた。その手触りは、心地よい張りや弾力に満ちた貴和子のヒップよりも、熟した女の色香が強くあらわされているかのようなのである。

「ほんとにママとエッチできるなんて、夢みたいだ」

しつとりと吸いつく感触に陶然とした眩きを漏らし、尻肉からむっちりとした裏腿にかけて何度も撫でつけていく。

「夢じゃないのよ。あんっ、だからほら、いらっしやい」

諒子の鼻にかかった声に導かれるように、祐介はさらに腰を近づけていった。ピクピクと小刻みに震えている硬直に、義母のしなやかな指が絡まりついてくる。

「くふっ、マっ、ママ」

灼熱の強張りに絡まるヒンヤリとした指先。あまりの快感に頭をのけぞらせ、うめいた。ズンッと睾丸に鈍い疼きが走り、沸騰したマグマが一段と迫りあがってくる。

「さあ、こっちよ、来て」

諒子がいやらしく開花し花蜜を滴らせる秘唇へと、ペニスを誘導していく。淫裂の奥に垣間見える、卑猥な蠢きの柔褻に心奪われ、熱い吐息を漏らしてしまう。

やがて亀頭の先端がしとどに濡れた淫唇に触れた。義母子の総身に同じような震えが駆け抜けていく。

（い、いよいよ、僕はママと）

性に目覚めて以来、ずっと憧れつづけてきた義母とのセックス。その夢が、いま実現しようとしていることに、祐介の胸には熱いものがこみあげてきていた。

「いいわよ、来て、このまま腰を、突き出してきて。そうすれば、ママの中に入ってこられるわ」

「うん、いくよ、ママ」

義母の声に押されるように、祐介は勢いよく腰を突き出していった。ブジュツと蜜液と粘液が接触し潰れる音を残して、ペニスは狙い違たがわず諒子の淫壺の中へと入りこんでいく。

「くはッ、あんッ、す、凄い、ゆ、祐ちゃんの、祐ちゃんのが奥まで」
「うッ、くカあ、し、絞られる。チッ、チンチンが、うおお……」

諒子の声に重なるタイミングで、祐介も挿入の感動を口にしていた。肉洞の奥まで突き入れたペニスは、瞬く間に細かな肉襞に掬め捕られさらに奥へと引きこまれる。

姉妹とはいえ、この二週間で馴染んだ叔母の蜜壺とはまったく違う熟母の肉洞に、射精感が一気に駆けあがってきた。

(これがママの、ママのオマ○コ。キツキツな感じだけど、すつごく、気持ちいい)
禁断の淫壺は、貴和子に比べるとだいぶ狭いようで、硬直をきつく締めつけてくる感じがあった。さらには、雑巾を絞るかのような強烈な絞りこみがプラスされ、意識が飛んでしまうほどの快感をもたらしてくれていた。

「動いて、あふうん、ママの中、いっぱい楽しんで」

「くふッ、ああああ、うん、分かっているよ、ママ」

改めて諒子の深く括れたウエストを両手でガッチリと掴み、祐介はゆっくりと律動を開始した。

クチュツ、ズチュツと粘着質な音が立ち、ペニスが蜜壺を出入りしていく。硬直を引き出そうとすると、待ったをかけるように柔褌がキュツと締めまり、逆に奥に向かつて進めていくと、快楽の底まで引きこまれそうな感じに膣褌の束縛が解かれる。

「あんッ、ゆ、祐介。いいの、ママ、祐ちゃんの逞しいオチンチンで、中、いっぱいこすられちゃって、感じちゃう」

「ママのオマ○コ、よすぎだよ。僕、すぐに限界超えちゃいそうだ」

細かな肉褌による扱きあげと絞りこみに、祐介は一気に押しあげられる恐怖を感じた。このままでは当初の危惧どおり、呆気なく終わってしまった。

グツグツと煮え立つマグマが、噴火口目指して陰嚢内を暴れまわっている感覚に焦りを覚えた祐介は、奥歯を噛み締め肛門を締めあげていった。

（まだだ、せっかくママとできてるんだ。こんな簡単に、終わってたまるか）

愉悦の火花が眼窩で飛び散り、睪丸が射精口を開こうと根元に押しあがってきている。必死に射精感と闘いつつも、祐介の腰は片時も止まることなく、逆に激しさを増して義母の膣褌を抉りつづけていた。

「はひゃッ、あう、逞しいオチンチンで激しくズンズンされたら、ママ、おかしくなっちゃう」

ヒップを突き出していた諒子は、悩ましい喘ぎをあげ、枕の端を両手でギュッと掴み顔を押しつけると、イヤイヤをするように首を左右に振った。しかし、息子の強張りを奥深く啜えこんだ蜜壺は、キュンキュンと鳴くような絞りこみの蠕動をみせる。

「くっ、ふぐううッ、ああ……」

祐介はペニスを襲う肉壁の絶え間ない刺激に悶絶しながらも、腰の動きを弱めようとはしなかった。まるで動きを弱めれば負けるとばかりに、硬直で熟母の膣壁を責めつつける。それは自分で自分の首を絞めるような、ある種の自殺行為でもあったが、義母を絶頂に導かんとする意地でもあった。

閉ざされた寝室内には、ブジュツ、グジュツと淫らな湿った結合音と、パン、パンという祐介の腰が諒子の双臀にぶつかる接触音が響き渡っている。

荒い呼吸とともに祐介が腰を突き出していくたびに、四つん這いになり量感を増した義母の豊乳がブルン、ブルンと前後左右に揺れ動き、熟れた尻肉が波打つように震えていた。

「ダメなの、そんな激しく突かれたら、ママ、壊れちゃう」

顔を枕に埋め、ヒップを高く掲げた状態の諒子の背中が、弓なりに反った。確実に美母を追いこんでいる、そんな自信が芽生えてくる。

(絶対、ぜったい先にママにイッてもらうんだ)

その思いを新たにした祐介は、それまでガッチリと腰を掴んでいた両手を、乳房にのぼしていった。律動に合わせて悩ましく揺れている豊乳を、下から掬いあげるように揉みこんでいく。

手の平には到底納まりきらない乳肉が、揉んでも揉んでも指の間からこぼれ落ちる。そのどこまでも沈みこむ優しい柔らかさは、祐介に安心感を与えてくれた。ウツトリとしつつ、しばし双乳揉みに興じる。

(やっぱり、ママのオッパイは最高だ。こんな、なにもかもが最高のママとセックスができるなんて、僕は、なんて幸せ者なんだろう)

義母の肉体の素晴らしさと、その熟れ肌を抱くことができる幸運を、祐介は改めて噛み締めていた。

人差し指と中指で球状に充血した乳首をクニクニと捏ねると、諒子の全身に痙攣が走り抜けたのが分かった。

「らっめ、オッパイ、ママ、オッパイ弱い。そんなふうには、ズンズンされながら揉



まれたら、はふうん、ますます、おかしくなっちゃううう」

諒子の言葉を証明するように、ペニスを呑みこむ肉洞が一気に締めつけを強めた。目を剥くほどの悦楽に、眼窩がチリチリと焼かれてくる。

「ふあ、くうおおお……」

意味を成さない咆哮が進り、ペニスが大きく跳ねあがった。粘度を増した先走り液が、義母の膣壁をノックしていく。

「くふうん、ゆ、祐ちゃん、はん」

「ママ、イッて。さあ、早く、先に……」

嘸み殺した声で言うと、祐介は一層激しく腰を振りたてた。左手は乳房に残したまま、右手は美母の肌を這うように移動を開始する。

しつとりもつちりの腹部を撫でるようにしつさらさら下へ、デルタ形のヘアのザラツキを通り抜け、ついに秘唇の合わせ目へ到着した。右手中指の腹で、小粒ながらもしつかりと硬化している淫突起を撫でつけていく。

「いやあん、くうん、ゆ、祐介、ゆウちゃん、ダメ、そんなところ、ママ……。飛んじやうの」

いまままで一番、身体を激しく震わせた諒子が、甲高い声で悶えた。突き出されて

いたヒップが、ユラユラと悩ましく揺れ動き、ペニスを千切り取られるのではないかと思えるほど、肉洞が締まった。

「うあつ、だ、ダメだ、僕、出ちゃう。くうう、先にママのことイかせたいのに」
祐介は最後の気力を振り絞り、腰を激しく動かした。ブジュツ、ビジュツと混ざり合った粘液が泡立っていく。左手では乳房を鷲掴みにし、右手の指は充血したクリトリスを握ねくりまわしていった。

諒子を追いかむことは、自分を絶頂に押しあげることに繋がる。目の前には無数の火花が飛び交い、頭はなにも考えられない状態に陥った。陰囊が一気に迫りあがり、沸点に達したマグマが出口に向かって一気に押し寄せてくる。

「ああ、ママ、僕、ぼく……」

「ママも、ママもよ。祐ちゃんがよすぎて、ママも、くうん、いつ、イッチャイソウなの」

「じゃあ一緒に、僕と一緒に……。うおおおッ、ママ」

祐介は勝負を賭けるがごとく、奥歯を噛み締め、ラストスパートにかかった。

「いやッ、は、激しい。ほんとにママ……。でも、中は、膣中はダメなの。ツくうん、出すときは、お願い、外に……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!